

1. 調査目的等

小・義務教育学校1年生から6年生の児童の学力を把握・分析し、学校における教育指導の成果と課題の検証を行うことを通して、学力向上に関する取組の改善に役立てる。

2. 学校ごとの指標

(中期指標)令和9年度の全国調査の標準化得点:国語 100 算数 102以上
 (短期指標)12月に実施する「標準学力分析調査」において、全学年標準化得点:国語51以上、算数50以上、評定1の割合16%以下(3段階評価)

3. 指標にむけての取組

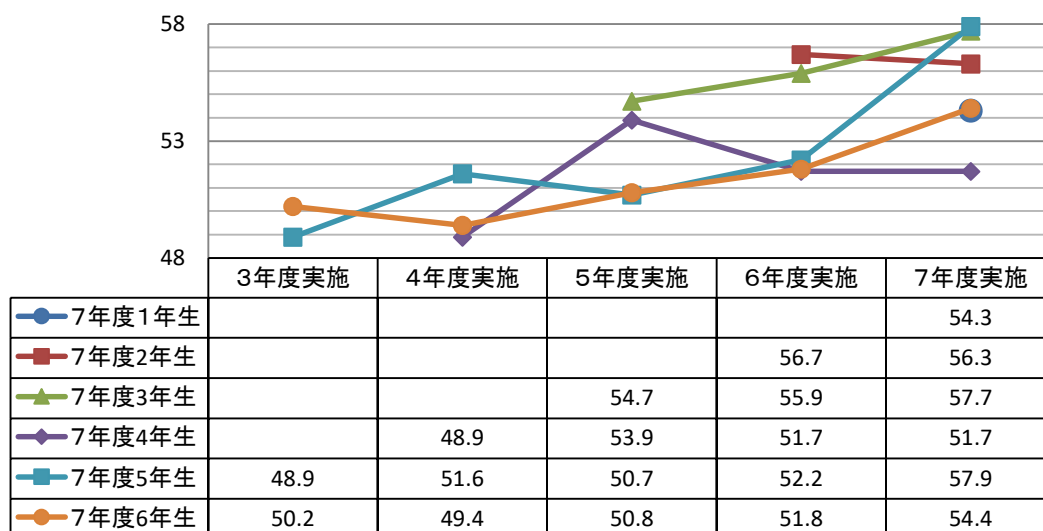
- ねらいを明確にした分かる授業づくり(指導→評価→次の指導)
- 算数科における複数教員による授業体制
- 算数科重要単元における分割授業(習熟度分割)の実施
- 朝の学習・給食前の学習など、補充学習の計画的実施
- 家庭学習の習慣化(10分×学年+10分)と課題の個別化(AID'リル)
- 1年生からのきめ細やかな言語指導(MIMの実施)

4. 調査結果

※学校平均(国語・算数)5年間の推移 (標準スコア:全国値の正答率を50とした時の換算値)

年度	3年度	4年度	5年度	6年度	7年度
本校(A)	51.2	52.3	54.1	54.1	55.4
嘉麻市(B)	47.0	47.2	48.5	49.8	50.4
(A)-(B)	4.2	5.1	5.6	4.3	5.0
全国値との差 (A)-(50)	1.2	2.3	4.1	4.1	5.4

各学年の標準スコアの推移



5. 各学校における分析

(算数科)

- ・複数体制や習熟度分割での授業の確立や、日々の学習の中で形成的評価を行い、丁寧に見取ってきたことが成果につながったと考えられる。
- ・全職員で、朝の学習「ぐんぐんタイム」や給食前の補充「昼チャレンジ」など、日々の積み重ねを行うことで、個のつまずきに合わせた補充学習の成果が出始めていると考えられる。

(国語科)

- ・全職員で取り組んできた「主体的に課題解決に取り組む児童を育てる学習指導法」の研究の成果だと考えられる。
- ・領域「読むこと」「情報の扱い方に関する事項」でのポイントが低い。日々の学習での指導方法の向上と全校で取り組んできた「読解タイム」の活用方法に課題があると考えられる。

(その他)

- ・既習学習を復習することができる家庭学習の内容づくりを全職員で共通理解・共通実施することができた。

6. 各学校における今後の取組

- ・標準学力調査結果の分析を行い、授業改善について再度、全職員で共通理解・共通実践をする。
- ・国語科においては、学習指導法の向上とともに、「読解タイム」の取組方法や回数を再考し、領域「読むこと」の習熟を図る。
- ・算数科においては、複数体制や習熟度分割での授業を継続するとともに、個のつまずきに合わせた朝の学習「ぐんぐんタイム」や給食前の補充「昼チャレンジ」において基礎基本の定着を図る。
- ・自分の学習状況を把握し、見通しを持った自主学習に取り組む家庭学習の個別化を図る。

7. 嘉麻市教育委員会としての今後の取組

◎組織的に学力向上を図ることができるように、特に次の3点について指導助言及び支援を行い、周知徹底を図る。

◆校内における学力向上検証委員会において単元テスト(全単元の80%において目標得点を達成できた児童が学級の80%以上になることを目指す)や各学力向上の取組について成果指標をもとに結果を検証し、授業づくりや学力向上の取組の更なる改善を図る。

◆「授業づくりの手順」や「学習指導過程の基本モデル」を教育委員会として示し、それらをもとにした授業改善を推奨する。そのために、校内研修等に指導主事を派遣し、具体的な指導助言や支援を行う。

◆小中一貫教育に基づき、組織的・計画的に内容を設定し、個に応じた課題の提示(AIDリルの活用等)を図ることにより、家庭学習の習慣化及び充実を図る。

※(10×学年+10)分以上の家庭学習の習慣化